土佐と浮世絵　　序曲

冨田八千代〈36 回〉

中城さんのおこたえ

「土佐の浮世絵」には、大変注目すべき絵師・作品があります。

お尋ねの「土佐での浮世絵」は、「浮世絵とは？」の問題も絡む、重要なテーマです。

いつか書きたいと思っていましたので、いずれゆっくりお答えします。

ひとことだけ言えば、「土佐の浮世絵」には、大変注目すべき絵師・作品があります。

絵師では「絵金」、作品では「自由民権絵」です。これらは、従来の日本画の「やまと絵」が王朝文化、「狩野派」が武家文化を代表する作品なのに対し、「浮世絵」は江戸の町民文化として生れ、庶民に愛好される風俗画が中心でした。肉筆だけでなく、次第に版画が中心となり、特に多色刷の錦絵は都市の工房で製作され、安価で大衆に普及しました。

制作地は、江戸･上方が中心でしたが地方にも特色有る作品が誕生しました。地方浮世絵の研究はほとんど未着手です。よい問いかけをしてくれました。

付記すれば、浮世絵自体の研究も戦前の官学研究者からは無視され、戦後になって欧米での評価の高まりを反映してやっと本格化します。絵金に目を付けたのも、高知出身の法政大学廣末保教授で、その愛弟子が田中優子前総長です。田中さんも、子ども浮世絵に関心を持ち、一度研究室に招いてくれました。

なお、日本画全体を理解するための入門書には、『すぐわかる日本の絵画』（守屋誠彦・東京美術）があります。大和絵の「土佐派」の由来も分かるかと思います。　　（以上　　中城さんのメール）

認識不足の者が単純に直感で感じた浅い疑問に真摯にお答えくださり恐縮しています。中城さんの「ひとことだけ言えば」の内容は一言ではありません。重要な指摘や課題まで含まれています。そして、視点も広げるようにとのお心づかいまであります。今までに、このホームページなどを通して、浮世絵だけでもたくさんの発信をしてくださっています。それなのに、粗い私の笊には留まっていません。笊の中は、「子ども浮世絵」への憧憬です。認識の無さを思い知りました。この HP に執筆された「版画万華鏡　1・2・3・4・5」などを読み直してみます。

3 枚の図版から　　土佐と浮世絵

メールには、図版 3 枚が添えられていました。中城さんが執筆された「わが浮世絵放浪記　「『子ども浮世絵』発掘とヨーロッパ展、そして土佐」から、図版を見てみます。この執筆は『大平山』第４５号（2019 年 3 月　三里史談会発行）に掲載されたものです。

＜以下の１・２・３の見出しは、写真への中城さんのキャプションです。＞

１．山本昇雲画「子供あそびおまつり」浮世絵版画、明治 39 年、公文教育研究会蔵

「子ども絵」を得意とした昇雲

「子ども絵」を得意とした明治の画家・浮世絵師に、高知出身の山本昇雲（松谷）がいる。平成一七年に高知県立美術館で「山本昇雲展」があり、東京の太田記念美術館でも展示された。二九年に町田市立国際版画美術館で筆者監修によって開催された「浮世絵にみる子どもたちの文明開化」展にも、公文教育研究会所蔵作品から昇雲の作品十数点を展示した。純朴な子どもの躍動感あふれる遊び場面や、明治の少女の優美な姿が好評だった。

昇雲は後免町（南国市）の生まれで、七歳で元山内家絵師・柳本洞素に入門する。さらに河田小龍に学び、東京に出て滝和亭に入門、日本画家にとどまらず『風俗画報』の挿絵画家、浮世絵師としても昭和の時代まで活躍を続け、最後の浮世絵師とも称される。

＜「寺田寅彦の浮世絵論や山本昇雲の子ども絵」の項より抜粋＞

昨年 11 月の「山本昇雲展」では、「高知新聞」も「ギャラリぼたにか」も、「子ども浮世絵」については全くふれていなかったので、冒頭、「子ども絵」を得意にした絵師から始まっているのは、意外です。興味が新たに広がりました。「昇雲は最後の浮世絵師とも称される」と中城さんは述べられています。高知新聞は見出しに「最後の浮世絵師」と断定しています。

浮世絵には、一点きりの肉筆画と、複数（通常初版 200 部）制作される版画がある特有の美術だと分かってきました。浮世絵版画は、絵師のほかに彫師、摺り師などとチームで完成させます。多くの人が携わるから、同じ作品が誕生し、安価でもあるから、それらが相乗効果となって、庶民の文化になったのだと分かってきました。その「最後」の絵師とは、気になります。

２．絵金や弟子の「芝居絵」が闇に浮かぶ赤岡町絵金祭りを楽しむ下重暁子さん　筆者撮影

幕末の絵師・絵金（廣瀬洞意）

幕末の絵師・絵金（廣瀬洞意）は屏風や絵馬提灯に描いた血みどろの芝居絵で知られるが、これは肉筆浮世絵である。彼は江戸に出て狩野派で学んだ際に、浮世絵にも興味を持ったようで、『北斎漫画』も所持していたときく。土佐藩お抱え絵師の地位を剥奪されてからは、浮世絵師としての技量を遺憾なく発揮、泥絵の具の奔放な筆跡と鮮やかな色調で芝居の各場面を描写して、民衆の絶大な支持を得た。平成一一年夏に、作家・下重暁子氏を案内して赤岡の絵金祭りを見学、揺らめく蝋燭に照らし出され た「浮 世 柄 比 翼 稲 妻（うきよづかひよくのいなずま）」などを楽しんだ。

＜「中城文庫」に見る土佐の浮世絵文化の項より抜粋＞

絵金祭りはどの観光案内にも大きく取り上げられています。「土佐の祭り歳時記」を月別に取り上げたのでは、7 月は絵金祭り（7 月第 3 土・日曜日）だけでした。上記の説明に、民衆の絶大な支持を得たとあります。絵金は土佐藩からの地位剥奪後は、赤岡の町に住み酒蔵をアトリエにしていました。赤岡町内に残された 23 点の肉筆画芝居絵屏風を収蔵した資料館「絵金蔵」があります。絵金祭りはその絵金蔵のある赤岡の横商店街でのお祭りです。

３．藤原信一画「龍馬役者絵」民権芝居の浮世絵　明治 20 年　高知県立高知城歴史博物館蔵（筆者旧蔵）

「坂本龍馬役者絵」の絵師　藤原信一

大阪の歌舞伎役者だったが、明治一六年に巡業のためにきた高知で、土陽新聞連載『汗血千里の駒』の絵師・山崎年信に出会って入門、腕を磨いて連載の挿絵を引き継ぎ、後に大阪・東京に出て活躍する。

師匠の山崎利信は、江戸の生まれで明治を代表する浮世絵師・月岡芳年に学び、西南戦争錦絵や歴史画を手掛け、さらに新聞挿絵に腕を振るう。これに土陽新聞が目をつけ、『汗血千里の駒』の連載開始に当たって招聘したのだ。藤原信一が担当してからの挿絵「高知城下のお龍」も、見事な出来栄えだ。

＜「中城文庫」に見る土佐の浮世絵文化の項より抜粋＞

この浮世絵はすぐに思い出しました。中城さんの著書『龍馬・元親に土佐人の原点をみる』（2017 年発行）の表紙です。しかし、浮世絵としては印象には残っていませんでした。

図版３枚から思うこと

この４人の浮世絵師の土佐の地との関わり方は違っています。昇雲は出身者として、絵金は土佐を出て絵師となりその後土佐で活躍、藤原信一と師匠の山崎利信は土佐に来て土佐を離れるということです。藤原信一はここで弟子入りをして絵師になったのも異色と思えます。このように関わり方は違いますが、この時代に中央の文化が土佐に届いていたことは伺えます。また、中城さんにおききしました。

幕末明治の土佐は交通不便で中央の文化が届かない文化的僻地ではなかった

確かに陸上交通（鉄道･自動車）が中心になった大正･昭和には後進地になりますが、幕末明治の海運時代には、東京横浜・大阪神戸・土佐は、多くの船便で結ばれ、産物だけでなく、人･情報・文化とも頻繁に行き来できました。全国の自由民権家も、土佐へは船で楽に来られたのです。福島県の民権家も、東京へ出るまでは徒歩中心で苦労したが、横浜までは汽車、後は船で楽に土佐に着いたと、述べています。上方と土佐の船便は多く、上方役者も巡業に楽に来られたようです。岩崎弥太郎も、土佐･長崎で海運の重要性に目覚めたからこそ三菱を興したのです。「自由は土佐の山間から」ではなく、**「自由は土佐の海辺から」**です。

図版３枚からだけでも、やはり、中城さん曰く「土佐の浮世絵には、大変注目すべき絵師・作品があります。」のようです。失礼しました。「いずれゆっくりとお答えします。」といってくださっています。

浮世絵も生き字引きの中城さん、急ぎませんので、よろしくお願いをします。

付記

「高知で遭遇した浮世絵展」の中に「中城文庫」のことを軽々と書いたのは、その頃、「中城文庫」にこだわったことがあったのです。

「中城文庫」を訪ねて　　失敗の巻

「土佐校百年展」で『筆山の麓』を PR する当番の前日、高知駅に着くと、その足で高知城歴史博物館とオーテピア高知図書館に出かけました。この HP で知り、行きたいと思っていました。オーテピア高知図書館での的は「中城文庫」です。

どこかに「中城文庫」の一部が公開されたコーナーがあると思い込んで出かけました。それらしきものは何も見当たらないのです。カウンターに行きました。「中城文庫を見たいのです。」に、若い男性係員は即座に「それは全て奥にしまってあります。係員と一緒でなければ閲覧できません。何が見たいのですか。」とすらすらと言いました。困ってしまいました。ただ、「中城文庫」を見たいのです。HP の「中城文庫展」のチラシには浮世絵が載っていたことを思い出し、呟くように「浮世絵とか…」と言いだしたら、すかさず、「では、ご案内します。」と足早に書架の前に私を連れて行きました。大百科事典のような A４版の分厚い書物 2 冊、『中城文庫目録編』（６８０頁）と『中城文庫図版・解説編』（４１７頁）を指して、「これが中城文庫の全てです。まず、これをご覧ください。」と説明。コピーの手順についても話がありました。ここまで親切にされてはと、頭の中は空っぽなのに、まずはこの本を開くしかありません。

とても重いその 2 冊を持って机に向かいました。「中城文庫」と一括りにされた、その内容の多さに圧倒されました。中城さんは、お兄さんやお姉さんたちと確か８年余をかけてまとめられ、忙しいお仕事のかたわら土日は「中城文庫」の整理・解説に取り組まれたためとうとう肺血栓を発病、1 か月半入院されたという、その大変さはうかがい知れます。高知県史への功績がわかります。巻末には、中城さんの尽力への感謝が述べられていました。

立派な 2 冊の本をあちこち拾い読みしました。チラシの浮世絵は『中城文庫図版・解説編』の Ñ　浮世絵　版画　蘭字」の N１４－４1298　目３１４（３０１頁）と整理されていました。2 冊を前にして、自分の浅はかさに呆れて恥ずかしくなり、閲覧はやめて「本からよくわかりました。」と図書館を出ました。歩きながら、本物の「中城文庫」が見られる絶好のチャンスを逃してしまったと悔やみました。でも、2 冊の書物に接したのは収穫です。高知に帰ったればこそ、大失敗でもなかったかなと気を取り直しました。